873
.M8 v.45

湖月抄

御法

45

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

御法 細 巻ノ名ハ以歌ヲ号之ヲ 河 たえぬべき法なから
ぞたのまるゝ世ゝにとむすぶ中の契りを 細 源氏よ
十一巻乃哀より林まくのまあり 花 紫上氏物
世よ語り

紫の上 細 一とせ煩給しより若菜下巻にみえて 以来とかく煩給し
いとおどろおどろしうはあらねど 孟 さしもなきやうなれど年月かさなれば病重り子細なり

むらさきの上いたうわづらひ給し御こゝ
ちのゝち。いとあつしくなり給て。そこはか
となくなやみわたり給ことひさしく
なりぬ。いとおどろおどろしうはあらねど。
年月かさなれば。たのもしげなくいとゞ
あえかになりまさり給へる(を)院の思も 孟 源の心之也 孟よりきこん之
おぼしなげくことかぎりなし。しばしにても 細 源の心也
をくれきこえ給はんことをいみじかるべく 細 紫上の心の中に源の院をおぼすを紫の悲しきを
べくおぼし。みづからの御心ちには この世
にあかぬことなく。うしろめたきほだし 細 源氏のなげきをいふ
だにまじらぬ御身なれば。あながちにかけ
とゞめまほしき御命ともおぼされ

とし比のはちすがりけをされ　孟　紫の心に我命をしからねども年比源の志ふかりしにまつくることゞもなく歎き世ありけんと思すにやとなり

さるべき因みありても
細　源の心にも紫上のそむきたまふてもそれをよきつかひでなるべしと也

思されぬを年ごろの御契かけはなれ思ひなげかせたてまつらんことのみぞ人しれぬ御心のうちにも物あはれにおぼされける後の世のためにとたうときことゞもを多くせさせ給ひつゝいかでなほ本意あるさまになりてしばしもかゝづらはん命のほどはおこなひをまぎれなくとたゆみなくおぼしの給へどさらにゆるしきこえ給はずさるはわが御心にもしかおぼしそめたるすぢなればかくねんごろに思ひ給へるついでにもよほされておなじ道にもいりなんとおぼせどひとたび家をいで給ひなばかりにもこの世をかへりみんとはおぼしおきてずのちの世にはおなじ蓮の座をもわけんとちぎりかはしきこえ給ひてたのみをかけ給ふ御中なれどこゝながらつとめ給はんほどはおなじ山なりとも峯をへだてゝあひ見たてまつらぬすみかにかけはなれなんことをのみおぼしまうけたるにかくいとたのもしげなきさまになやみあつい給へばいと心ぐるしき御ありさまを今はとゆきはなれんきざみには捨がたく中々山水のすみか

このたびことに思ひ給へん
細　世を捨て此世まではとこまかけのうち　孟　来世よては同蓮の座をともなふべけれども此世までは一所をしらじとなり

ひとたびいとしさ　細　紫上のみ御なじさ　師　御病の心もとなきをそ世をすてかねたまふとなり

あさへとゝ　細　花鳥ニハ
あざれしゝとゝ云詞とえこ
河海ニあさきんとい
つり。河海の説可然也
此ゆりしとすくてハんひしろ
よ　孟　出家のゝけを源の
ゆるしなそてりと紫の
らく。　三　同説　女ハ三の宮
とをむりぬ物しらく

三　此出家
我此身どとも
とゆりし給ハぬゝすと紫
のらよ罪障ふかきよ
うく婦けのおもうと思ふ
うき　孟　紫の因果よそ
此説とけぬうとく
法花経よアいそぞそ
三　紫上逆修ニよア
え人まりくせられよ家
へし

こうまごうりめぐく。此滑しとゝどこらわりの滑
どもよ。くぐうらあさへしらぶのますくの心
らをとこすん〳〵此は。こしるのうとくれ給
めぐりめり此ゆるしるくてころひら河
よ此がりしてむとさ海あしく滑いるゝき
やうすれバこれとよりてぞ女君も
うしめしく思ふさて給ろうわがの此身
いさとつとうろうまじきうりやとよう
ろめつく此がされ名のとぜらこし
の此家しくうせなすり給きゐ。法花経
よアいそござて仏書きしすふわの此と
のとゆりもて二条院よてぞし給ひける。

三　七僧乃法服なども御く給のすりのく
いろねひめよをそじめてこのよのろ
あやしとうきうろしらしさまこるよぞと
をいといろめしきまざととらうれき
まいとらくしさ両小もうさてし給も
ぎりられバくすうしきことぐもあつせ
給いざうりけるよ。女の此をきそしよいつき
をうく仏の在よさん〳〵りしひ給ろの此て
ろれわど銭院いいとりまりあらしとこをな
まるて此滑しこの此あつらしひぶなまりの
こしちうりとうらん。いとろまを給も家。
ぐ
京人兼人るとしのくといたゐの志とり

此おくこの此あつらバ
孟　源も大りこのいとうこゑバ
うりよそ。紫の連くこを
あまさまつく

ことふの事なるべし

細 后宮とは一人にても二人にても明石の女御をさして明石女御立后のことゝ見えて侍れども、なし

細 ふるきよ
そのかみの世々といへるなり

三 一乗塵の数の世々へ、五百塵点劫のことゝ河海にみえたり。おほきなることぐし

こゝろや

みしのわたり

細 紫上の御居所也

孟 紫上のかたは寝殿のぬりごめにて、花ちるは寝殿の廂の壁

わきてつかうまつり給ふ。内裏、春宮、后の宮たちをはじめたてまつりて、御かた／＼こゝかしこに御誦経、捧物などばかりの事をうちし給ふだに所せきに、まして、そのころ、この御いそぎをつかうまつらぬ所なければ、いとこちたき事どもあり。いつのほどにいとかくいろ／＼おぼしまうけけん。げに石上の世々へたる御願にやとぞ見えたる。花ちる里ときこえし御かた、あかしなどもわたり給へり。南東の戸をあけておはします。寝殿の西のぬりごめなりけり。北のひさし

どのあたりまでの戸などをたてゝ自然の調度などをおく所也

仏のおはすなる所

孟 観経云、阿弥陀去此不遠とあり。極楽の荘厳をおもひやるなるべし

ことならさんだんの事

三 八講は五日十座也。五巻の日といふは中日也。此日薪の行道あり。行基菩薩の歌を声明にて、法華経をわがえし事は薪こり菜つみ水くみつかへてぞえし。提婆品に採薪及菓蓏随時恭敬与といふ。さんだんとは讃歎也。一品の大意分別とて法則よいふなるべく

にかた／＼の御つぼねどもは、さうじばかりをへだてつゝしたり。弥生の十日なれば、花ざかりにて、空のけしきなども、うらゝかにものおもしろく、仏のおはすなる所のありさま遠からずおもひやられて、ことなりふかき心もなき人さへ、罪をうしなひつべし。薪こるさんだんのこゑも、そこらつどひたるひゞき、おどろ／＼しきを、うちやすみてしづまりたるほどだにあはれにおぼさるゝを、ましてこのごろとなりては、なにごとにつけても、心ぼそくのみおぼしゝる。

孟 さんだんの声ハ薪こるの哥を博士にかくる也。十補よもを入て六位
蔵人ならびに為ひて主上の御行幸のさう人行之儀式の哥とよませて唱ふ
と讃歎の声と云。是又業上の事さらにそてあり
きりまうしうつりかげに 師 行なるまじはてしうさ侮之我身のしてを思ふすむこし入
てよしくこの此とすりてと いふ心 孟 ましてとありまそ此をとの心へし精神
虚まうよ行ひてくわそうるへし

竹かね 細 このこへ採菓汲
水のかく此身を菓によ
そうりよのつはハ早下し
てそろくと思ひとらるむきさ
てそる面白ふとく。三薪
こうるまゐと付て此心への
かく業上の哥れ此薪ハ子
采給仕の薪よありし如
薪尽て火滅のさまてし。
竹中し此身なりねどう
きりハさまずぐよう也はとと
此くり 細 すなはりあきす
とんかそこさ 薪なるとハ
いまくしくさとんの糜
燃よりつしそしまくさこらハ

地 あはれなることよ三衣しそへて包
細 白衣ふあをよ身る施之孟 此本の縁之
唐つ 業上
おしろね此身なかくしを頂きてそ紀
まつきるんとの御しされけくりてゐや
上の心づつひて 師 例の此え
そさをちんし後のさまてしをこうろをく
れさりわさりや。そこなろとるくぞあ
染つ 業上
うきてあるさかハ見ふをとらじめすその
世よねりふ法ぞたちけさ。徳のまそうへ。

しらく後つり 細 千時奉事経於千歳提婆品千采給侍のくさ。子采給侍を去ろう後ハ
こうまこう
とろを給まて。子采の給ともまうらぬうべきこし後しまうへ。師なふそらじ如くみく
行未とくそく法を行ひ給らんとく。子采給侍のむとりてませきら何奉日
孟 法するとあてハ果も面白きさてとく
さうとくさこしくよ。ごらあはれをきりつてこれ
まろてくれ 地 りそう。そのぐくとなも御ぞ
らけ。霞のるとりうこえんようさ花のなさふ。な 細 業上
手生ましんとあすへ之 暁 業上のこゝ 玩ぶまでもとなきれの空の力あう
代まよこうろとそきりぬへくみかりひまさ
まてく。りくちどりの囀るも。常の音より
ぞとくぬらしして。りのくあそれを梢よ
しろきまものそくねゆどよれうりて風靡
て。こうまよなうゆどゆの寸年つりこのぐく。
こうるやうよみぎきなしく笑ゆりよこれ
人のめくさうけうなりのくいうくるなどとも。

霞のまきりそてこう
暁 山桜るとこの末うりかの
かくもたそしこそ隠
うつくれ

まうわつ 細 河海抄説也
よ下用ひく 河 陵王よ急なり
しぬるまきと急りうるちと
いわれ緩急の急のごとく。
或説よ新羅陵王急説
畧記之又 呼二奏急
みなんの 細 見施の人なる
ろべし 師 舞人のがつわり
よろるこ 乱 陵王乱のこと

うきの所とりくべし　孟曰
三　誰人の装束の所之葉
の是ま肩ぬぎさるまく
花色衣うきのすまく非
之師同義

抱のおりくるはおりしうのこゑんせみとこそら
上達部の中にも抱の上手ども（ぞ）てのこさん
様（あそ）び結ひたしもくちらげは負（なう）わろ気
色どもうるさく結ひにも脇かくちそくすしこゝろ
と思しられたこゝろのくちにはまろ何の（細 此当上の人の申るうべし）
しし衣はゆかしさまふ眺（ひ）日例すらでんれ（孟法）
（ア来るとしやうて紫上のくさびれまふうとし）こさとまつりし名跡しやいとくるし
（抄 此段皆紫上の心中之心がそことき也）そしかまへる。そしどろりしら抱の物がりご
とは。あらうつひあそびのまふへどの。れ
うちもきさ海のそそのがすのがえども。ご
と絶の音（ね）ともやうくまつさところめ
なりんとのこゆ何さるれだきしもめと（孟 紫上の今）

夜多さの　細 六条院にもて
いひかりし結ひなんと花散
里るとといかり花曰
抄 女来るとまたしうはもこ
りくべし　孟同

さえぬつき　細 紫法身を
弄ぶさり少法の値遇（チグウ）て
世くまわたろまじき
とく今日縁を結ひぬ
まぞ我身世をえぬとも

（とうくりと之結おく）まうおしさ人のりかどとく。わつれりのこと
さされ結まして夜多さの時よつけくる遊（あそ）
びさくふれねにも。るす海いとましさ志くと成ら
ろだとのづしこころまでつまもとしめど。
さまずはるさけをうつしすふきく（ぞ）は雅も（孟 雅ともとも申くぬ世）
（されどもん我独と紫の心く）ひさしくとまうづさ世ゆはわくぞうずれど。
まりされひとりゆく志ちくでるりるすん
とゆかしつくらいえし衣るすりうしとそて（三 十八講果つる之）
くぞのうきてくる結るんとおすらも。と紙
さまりれめさそおしまうら花ちる里のれ
りしは
紫上　ふうえめべきこのうをうしぞしのまるく

此法の教へハ西まで死とく。師もしぬべきこと有。彼のゆうきらく。此法にまさへ
より。世にみちて結ぶとて。花散里よの中の教へ。只ふのみ法のくちぬえんに中
のちぎりを世々にまさしく

ひとひとハ　細 明石上を思
雅として姉の人乃えし
ことを云ひて結して法り。
此方ハあかりのまして花散
ちりさとの作く　三 大かさ
のおかもとくるまさことにふく
花散里の年ふけまさり
人なれど我身のかすを
頼せしや

書くまでこそ　三 幸ある
李山の帰くこそ祈念
あるべし花々由あり
師内にも別々とより
書さて更に時ハ参結と
てありつるハ書くまでそ
有く

世くまとむすぶ中のちぎりとこれくり
花ちる里 ひとひとくちぎりハ結じ人々このおう
とくるされ法なりとも。やがてはつるでよ。
かざんの灌頂さんゆうるすしあとたくく　三 懺法
いうとさことえをさせすふこそ法も
しるすれもこえぞ結へおれバ例の
ことよ如て。うちへさるべき所ぞ幸すくに
てぞをさせ結ぞう。るりよまりてもまい
女の男気之 のありさまへいとどきて入すぬべきあり
く也けり。そのことく也くろくしりう

ひんがしの對　暁 二条院の
東の對ハ中宮の御体而
分かし紫上の寝殿
まちかふえ於日

ゑていめん　三 行啓に
代々のみ卿のさかりを
年之。花 行啓ハまげ
寝殿へ成まりて紫上

ぬれこころすれど。ふで　五 紫上は病くまよりかかりて　いとまうさき御よ
まりし人まばむつけよ所をくるや
と結くとりあへしうつて姉へでもいとま
おりしまゝんとするよりと云ひゆふを。
まげりきくしあくらしうるすこされ
あさき御ところすかく。のこ也しもこれたる。
師 ひんがし中宮二条院に行啓あり暁
中宮の御この院にまうでさき給。ひんがし乃
こつにかりますべくされど。花 寝殿へ紫上住かる　こまる事
細 紫上の心之
給ふてしまふ儀式るなど例によりつるなど。
暁 宮をまさとしいまさるすくまゐせその心
このせの事さ御とよるそでも如ぬうる
どのこ也何をば。まろげよつけて御儀
紫の
まり。名對面をきて給ふる。その人々の

と名謁に侍ふの公名
ふずの名のりまうすと
多かり之 河海抄 名乗啓
北山抄二 六府次将以下 下
敷近衛等供奉 褻衣同
其外宮司兼中サ将者
帯弓箭供奉 入御之
後王卿名對面 宮司同
定
と乗車もとはうれう
細 源氏中宮の御前に
源氏給ふく又御方へ
源氏給ひ 孟 中宮のま
しまさるゝをよ源ハ紫の
そむにおはしましてべう
よおはせぬそとさふるれさ
みとく 細 花鳥 中宮
の御詞とこそいふにこ
れを紫上の詞く中宮
の宮の御方よりかへりけん
へびんなし。又紫上の気
色みえんともくついて

人々どもとゞめてさふられ給ふ上達部など 兼明公中宮ゟ
いとおほくつかうまつり給へり。ひさし と紫上と寝殿にて先対面ありし之 紫
きの対面のとざしもめづらしく見えて。
御物語こまやかに聞えし給ひ。院いりおはして。今 源
朝はすぐるれさうらしてむとうすり 孟 清之 令座
やすりやすき給ひんとて。よろりまね。 紫上中宮と始てされ対面ありき之 源殺れ之
御さねまするとられしとまうろもい 源の之 細孟 紫上
とものうるさき程のれすぐさめるかうく の何 紫の同
よおりまして。いおきさよわうて世給い 細こ
んをうさじけるし。気らんことうくとまり
すくなりまで。御れいとそ。あずしはいるさ 紫のとん
よかりすれど。おりの御方もわかりまて。 えんまく 中宮のく

まゐせらしく。三抄 紫上宿
えお方へよハ紫上ハ寝
殿中宮ハ東対くるれど
よろ方ありてハ直の御
對ありかくさ御忍おはし
まさるよまくらせおわん
かと公中宮ハ東対りく寝
殿紫方ハ細く御かわん
もあり之 紫上の東対
へおはりハ御中あれば
不叶 是御退出あれそ
寝殿よそこまします
なし

うちとけずよそげなりしを御物深ど 孟 賢気
をこらして給ふ。上はいとうつくしう 三 紫上の御心也と
よ。めでたしめぐらしく御覧ぜられどさう 三 二段…のみなるべし
しげなるらん後なきのみひかりこ 三 紫の君にはれさられ侍と くりてそよこ
ともかし。すゞしき世のつゆをさそ まそんせより
給ひ御ねよそぞくらす物うく。
あさはかなはあくまずの給ひしるけれ 孟 何ゟ
ひきたかくそこにおもんばかりもあはれ
よ。物さそうけれとこそしるはそうくう
みえしものさらはさしなりまでても 紫 細 明公の中宮の御
のくるれはゆくすゑをゆかしくをや の何く
なるさうくされのりけるみをあかしむ

あぢうくのそ　細中文の
けんの中にはへそうく
ませうりくへもりまん
ぞそとなり
ゆくしげふもどそ
細うくめくいらくし
きらく既ゆへしげり
るきさそこそくしう
らぬく義幸の次ま
のやうに何とるす少女
ろこのうと中ゑへ下を
きおへのうしちう上哀がり
せそいのまぬへうそれなそ道
遠度いうを添だくれ
と後師京後數感おりし
おりあく
れいのわか沙方よりわざらり語
花根沙方とハ东ハ對し
そうしふて季沙談経
のすどみそころのうく
三定沙後花ち後下沙中文

んのもじりもれうりめやしそ、おうこぐくとあ
へるかれうわのめかひ、いうじうゆうしげすり。
沙ん中文の沙ん
ゐどうくのこ愛しくしんと地用もとよ。
中ゞゑくらゑゐさこすねゆしげよそどへ
紫の之
さうそしすし語りど、りのいろぞゐすどに
細紫上の沙方にきつふんまし
ぞ、年しつうまりうれさうひらぐ
のどとうろよるべ、あすいとおしげろすれ。
紫の陰道まし
このんのへ抑しそるうるんのちま、流　紫
中文の之
うろうとゞめそしうの地よりとをてゞつる
沙中文季沙談語五否ところうく
まぐうそし語ろう、こゞ絶るゞようり
沙中文　东の對
てぞ、れいのわがれ宮よりくより語ゞとの文　細白紫々
京之ゐるをるへー
れおもうるのれ中よ、いうおりしげゆく

のゆりまかくニ条院への
ろく五まいのわら沙方へ
东對くぞんへ中文の後
まく

きのへうくんかりそへ
細紫上宮方よりえの
あういねんゆさ亀移が

紫の之　五白へ沙紫の過之
わりきまふど、うちくらのひまよあいはなまへよ
そへなりすそ人のさうねまよ、ゆまうつが
五白ハ紫の哀之　細今上之
待しざうんよ、愛しおるんやしゆそへすへ
ぞ、いとゑしうるんゆ、まうらいろうのへ
細中文之　細紫上之　三むく請てヨム
よりりそやしりう、げくいよそそまき
てどうひ愛ゆれおかせむぞそんてむつー
白の個ゐるへー
うりるんとそ、めくとすりゆうぞうらう語
紫の夜之
つまさ夜かりまれい、潤くゑすぞうる
あう　細紫上羽
まゞい落ぬ、地らみよぬまひうばぞよ
をとまてこのさいのまへるら紅梅と
いと佛う
櫻よは、花のおりくよこう一ろとじめそ
りそおそひまへぞうべうんおりそ、ぶよ

仏には桜の花をまゐれ我
のちにかせとんもしぐで
とよめるは心なるべく
し 河若人散乱心乃至
以一華供養於画像漸
見無数仏法華経又曽非
種縁思亮為是華時
供世尊 菩家

ことは身にしむばかり
細 秋ふくはいかなる色の
風なれば身にしむばかり哀なるら
ん の意也

今しばしは御らんぜよとも
三 紫上の心よりの詞

をまもりて涙のおつべかめれば
て立ておはしぬとりわきておほし立て
奉り給へれば此宮と姫宮とをぞ見
さしきこえ給はん事口おしくあはれに
思されける秋まちつけて世中すこし涼
しくなりては御心ちもいささかさは
やぐやうなれどなほともすればかこと
がましさるは身にしむばかりおぼさるべ
き秋風ならねど露けきをりがちにて過し
給ふ中宮はまゐり給ひなんとするを
今しばしは御らんぜよとも聞えまほしう

くはおもじきを遠慮ぞ
めやすきとおもへども
けしきをうつくしくてさく
さやうにはえせぬとし 孟中
宮を孫宮と称いあれ
どもとし
あなたわたらせ給はぬ
孟 中宮之 細 紫上の方
へわたらせ給はず 抄 六条院
より中宮へ御出なり
紫上の御対面なき
も病中なるしきり也
二条院は又中宮の御啓
の事

思せどもさかしきやうにもあり
うちの御つかひのひまなきもわづらはし
ければさも聞え給はぬにあなたにも
えわたり給はねば宮ぞわたり給ける
かたはらいたけれどげに見奉らぬも
かひなしとてこなたに御しつらひを
ことにせさせ給ふこよなうやせほそり
給へれどかくてこそあてになまめかし
き事のかぎりなさもまさりてめでたかり
けれときし方あまりにほひおほく
あざあざとおはせし盛は中々此世の花
のかほりにもよそへられ給ひしを

このゐまゐてそいとよまず
孟 中宮の御かたへ来給へる
くんりうし源の御まへ
抄 おほよも中宮おはしまし御病
そそ起病うつるおもへば
をんな

げにをかしげなる御さまにていとかり
そめに世をおもひ給へるけしきにる物なく
心ぐるしくすゞろに物がなし。風すごく
吹出たる夕暮に前栽見給ふとてけう
そくによりゐ給へるを院わたりて見たて
まつり給ひてけふはいとよくおきゐ給ふめるは
この御まへにてはこよなく御心もはればれし
げなめりかしときこえ給ふ
かばかりのひまあるをもいとうれしとおもひ
きこえ給へる御けしきを見給ふも心ぐるし
く。つゐにいかにおぼしさはがんと
おもふにあはれなれば

をくとみる 細 けふはおきゐられ
身はかくありの物とはかなも
それぐさげみかりなり
どのみふとりつゝ。ゆきたる
ようはしぞかへり見れた
くとえるは起かうこゝろを
そへたり
やゝもせば 細 源の歌く
紫上よそられ給ふ
とゝまくとおもふそふ
づこしく 孟 自然紫の
ならずば独よやがてよの
なそそとおもへふとく。
回しくへとゝもよこゝろんと
しほかやくも世ばさてしぞ左
ぬへきとふかくにおもそづる
あかりやの露 和泉式部
きのあかりの事やよの

秋風に 細 中宮の御歌にて
世るの無常をいへり。秋が
も草葉はどうもの事と
とつ哥のならし
うてらく世 細 不審

紫上哥
をくとみるほどぞはかなきともすれば
風にみだるゝはぎの上露げにぞおれか
へりとまるべうもあらぬよそへられたる
をりさへしのびがたきを見出し給ひても
源の哥
やゝもせばきえをあらそふ露の世に
をくれさきだつほどへずもがなとて御涙を
はらひあへ給はず
中宮の御哥
秋風にしばしとまらぬ露の世を誰草葉
のうへとのみ見んときこえかはし給ふ御
かたちどもあらまほしくみるかひあるにつ
けてもかくてちとせをすぐすわざもがなと
おぼさるれどこゝろにかなはぬことな

行のかく　花にのびるに
令とのふる物なくいふかく
せかくておかんとやいふ
婚拾

ゆうかげり　細　発句ま
でれとみぐるしるなづ
らひきなくし

まくしたてゆく春の
孟　風よそろて萩の上
露に紫上をおくとう
けて中宮の事也

三　きれくもなくて
生えりすひしるおよ
あり

孟　うらに紫の上論く
まづいふけうめんかるきそふれしうちまらく。
細　紫上中宮の（ア）紹詞　孟　中宮に還御あれとて
今ハりくしせ給ふの。みづかりぐらいしくらし
くまり給ひぬ、いふりひきく打かりまうろ消　よりまるんと
どくいひすびしいひきあげよ給ひ。やし
てごさきのきしきそふしまてるさ給の。
つゆかりもいとしのりけげすくこそしおへば
いつよゆかでさりてよしもそ。宮ハ消てとと　ゆん中宮めくし　孟　紫の上の
らへそてまうりて、すぐくこそなう給ふおよ
こころよきしゆく春のこらえそてかうり
よきしきまへいばごと給のつひどきとかぎと
もちろれらちさうきしらさえぐくこ
くしてゆうきおすみおかりよるしらひすてれ

あと給り縁つて　細　今ま
のとらぬくと見まふ事を
中宮の先限りなく嬉し
くとひのかく　孟　同義
上主源由段かまりなくとハ
此給丢をこころつる事う
えしくもみ天なるしく
もゆがもくし
あけられの夏よ

三　世との無常の事ひあ
るうすとも忘られど只
めずかりのやうに思ひ
まつくし

りかけとうさらひめひらく秋一夜に海く
のこらとらくさせまへどうひめまく
めでうかどるよ消えそてまぬ。とや　もとら
給まそてかくてさきまつさまつるとくぎらる
くゆかもそ。これもくえらりの別　生者必滅會者定離の理　そさ
こうまへあかりとくとく
どひあらくくもゆ用されども。めづらしよい　字眼也
細　明說なり秋の明りなし
きしくあげられの夏よまひまふかく。
細　…
さくろりや、きうしきんかくせざらなら。
さあふ女房るどもあかりぐらうさくしよ
源
物ゆかしうるす。源氏まして紫がしき河
孟　夕霧を源の…
めんとこうけ思ハかねのまくしちくきら
まつる後の事しのまくよとひしとなり

あらましごとの
盃[illegible]紀
[illegible]
[illegible]山の[illegible]月

まして今は後の世[illegible]此乃
[illegible]
[illegible]
[illegible]
僧[illegible]
[illegible]
あらんこの世[illegible]
と仏の[illegible]今[illegible]冥途
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

此物のけうとの
お物のけうとの出家の
[illegible]
[illegible]

一日一夜　細　出家の功徳を
[illegible]　同　觀經曰一日
一夜受持八戒齋一日一日
持沙彌戒一日一夜持具
足戒以此功徳廻向願求
生極樂國[illegible]
[illegible]
細[illegible]果[illegible]
[illegible]
盃業の逝去[illegible]
[illegible]
ても眼おの想[illegible]
こそ後世の[illegible]

さ夜よ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]八戒
[illegible]
一日一夜[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

このえそしところすひ給
これみろく佛の菩提不
覚の知ハえてすてけり
そのうちもれて衆をすくふよ
喩ハ為をすくふよときをそでわ
うたし〳〵――
比翼を両海に引く帝
弥ハ生ておなじ人の色を
そうでむかしくる事
るまし弥勒の世をかね
面白し

なやうまかく、いかゞ侍るべからんと申すて、
（細 されど侍とて君おはすとて）れいのよこりさふらしぬべ・さこてろざ
しありてまそでぬそうその人の人
るどめしてざるべきこしくも。この
ぞとこるひ給。（細 夕顔の人くる事をさきとて夕の方にて）しじるやかやうこの
けるこころありしうじいうるのらん
世よ（細 弥勒の御事也）あるしじらくもとすくん。ゆの
みもれて衆とぞうるよさこぬとしるをじ。ら
みもとうれどもりひつきつりの。
声もつなよきり世給うぞをうめうよ
こそハあわれむそのしきれハうしそても。今
つきひえきしんのうずくしくぞのべきおり

いざいまよかりなよ。いかでりおりんと
もよ。つくしもおへぞありれて。女房のわ
る頭さはぎさまどう給。おなか（夕顔のいまかうして）海えぞし
と
えづめうかみく。れおすのくさびくを。
りのう給まされよひさあげてえつ（おもハ夕顔の几帳を引かけてえへ）へん
ハ源のくとあけれひらりも地濡つな（細 源の笑上のそこ面を見すそ）（おもハ几下の面なるへ）
それハ地わとうふつちくしけてえる
つも給よおくずくいくしけよめてしう
てのくしよこあら。れりわのおくうしるも（物くれかとへ）。
こ（細 夕顔ゝ）のこうみのうくのぞきまみ侍こうて。
（孟 夕顔の云人のふよ源のうくまうぬし）めるがらようくさんのにうえてもりも地ば
まかねなめり。うくるすよ（細 源の何ゝ）てにもまうさくう

ぬ気色なげく姫の手負ハしきりにせまり
そこそて袂をとりかはしてまつ程
ちぬの志も涸まられてめとみえ給ハぬ
と志ぬく志ゆりあけてもなりなむと
哢 志ゆりなしこ志なまりこ後へし
ありまそなれしとうくひるまさはまのこ 三 夕霧
のこゝろ
とりよこころまでひきとめべしれどし乃 花の香し
うくらやられまつる程どこちらくさ 節まい
りしかく霧ぞらきこえれきる気色
もるうつやくとろくしげなりさるそ 細光守し
たきりえのきさひのいとあかくよれ夕めてい 細燈し
とおろくひらやうゆくどうくこつま 細つらふるとらこを
そゞしつきてこもありし〳〵くのれりそ

なしまりもいふりひなすさき海よなまこう
ろなくてうしさまへあれわりき海のおう
ぬ取なしとつりんをさしるすりやなれめ
よふれおくしそうびひるまさぞこなする
よ志らかいるあ赤しおののやうくこの汲り
らよとまくるんとわかゆうまおう
なきこるすりやうくもつりなれきう 女房
なとの袖かりほゆりもなかれハ流そるみ 孟源の句を切ね
まごくも光てまされどかなうくれる 心づめてとく
らとおれからよ志川めうそて涙の汲こ
とくりしなからめしへもりなしとゆかをそ 細 夕白く葵上繁の事へ
こともおやまくきう給しは身なすれども いと

ちまつるおしね 細 面白紀
移く夕霧のりく 師 夕霧
のかなきくたなりよ配
入らうもろも亀八景
の死骸よとまりん合え

いくまゆうくうちてハ 三
おお姫婚礼のうそと身
ようけく知のうるすくし

それは給ひけるとぞくび
なき跡とてゆりけるに

うしと見ても 河 かなしき
かなしと見てもなぐさめ
河なくさしの空かりなん
それ 嘆 川あるらとそ
なぐさむしもわれどもさは
きもなきぬほりしかや

人はかりもなく 細 源のうち
そ聞るおはしとみて
さり 三 葵の河も聞るよ
おるこり 河 栄花物語云
車のおり 後おそきて
せまり

かうゆふくるゝて いまはさるべきさり給ふはさり
けうしく御そばくへくるゝかしらざく
ひるさきぐらし給ふ。やがてその日。とうく
さわぎける。さうざうしきこと限りなれど
とうてまくし給ふうちにまかそ。
こゝうへき世中あるりける。かくことひ
ろく呼の所にゐるくちゝこゝろてぐくう
なんしくしなきかけれど いとかなく
き煙の立ちくのみ給ひぬる色もなき
いのちしるれど おくるべく うしろやすき
むかしきくしく人はいつそなかりける
かりぞくそしめうらん人はなりける

十四日よくせなそて 細 葵上ハ
十六日ようせて十六日は
やがて葬りしに宮の誤
よせるに古人の説とぞ
らうし六代のうしとし
野人の雲もかくれさりく
まなくて世中なりけれ
らるよ 三 野人の雲も
のも文字あるて秘の雲え

きりとゝと物のこゝろあとくねびけとさん
なりぬいかなりけれど みかりの女房も
ましておぼしめしまとふふらしてくる御
まいもほかるびゆかぬべきさまそ。いそのも
かひろ。むりしるねのなみたれいそきみらも
まゐりし河のあたり月さし出づる
いみじくりのこゝろやくかなりや。月のかの
さくうら荒くしと夜はくらくれまず
ひまつる。十四日まうでいそしてこれは十六日
の暁なりける。日はいさゝかやうにてまし
わづりて野辺の雲もかくれしかば漁す
て。世中なくしづくうつらはいとゞいとりしく

そくらり。又當ハそゝりゐ
さわるれば世の中抄や
しつけられしらうり

青のしとおり
孟 野分の時夕の景を
又まひしうこ

いとじられど。とゝうとてもいく世らいふべ
きうくおりあしきのぎされば。むりしより
の御目はもしげまわしく打り目をどかん
しはさ須のそゝりと御目をべこのおど
ともくごさんとし絵よ。胸のをとこわくるぞ
ま人うさうりけり。大殿の私もれいとまこ
りわすて。あかしさ海山もまうで絵へど。
物語ちりくそつひてふくつしく。いとど
されそしうらりをおりよりあしくうて
てまそて。しうつけよおすくさあ地のふ風
時らぶらりて鳴夕霧よ。昔のくしと笑し
いとゝ物のりよりそてまうりし物とし。

御らき絵く
ケとむ 細 羽勝の細
なり
孟 仏ホト

いめへの 細 おりし野分
の夕を今はのこいよとひ
おきひしきし 墨拵古の
おもくらの後の事しく忘
れがくさこよ。最後の
葛への贈給忘しく然
しきとふくめさう前く。
そんを下の詞よくとて
つそ。夕おさへゝらりけ
るしうおりつや

忘しく笑し絵よ。みゝさりのおどくのゆめ
乃うらりをしるとど。人まられどともひつげ
給よ。さへりてくうすしられがいへめおはう
も見てしじとつくそて。阿弥陀仏へとひ
き絵もくのりどでよまづくうりしてぞ。み
よ洞のおもひさせらむ興あり
ぐこの出そりそ ららあおる
孟 夕霧の巻のこと
いかへの秋乃ゆふべの忘てこたいまえと
ええしあけぐれの哀。ぞあらうりさへうう
なう。感んでしるさ侶ともさつくりとなそ。
およ四十九日のりし宮りより他法ありて
さぐまりさる念仏をいさうりのすゝく。法
葛絵るとすをこ世絵りこじいて夜あり。
花そハ源氏のえれ
ふてもゆさそもあうごこのひうらまつく。

淡はえ名ら歌を
三 うくうのをどれさる身之
それも人はいうとおり身
ぞうくし 細源氏への時案
上の淡をみそそ身も給
しくらいふ給ありさ
れど兵部卿は我身の上を
ほゝくと思ひつゞけ
て我身のうき歎きう侗
なるべし

例のさかきへうらよれ
孟継法 おかそむさ
の此母御は身まうとを極て
心よをふつうひ念て
此わしめしうらうの
わどうまいよ何としも
孟 生家のさうらうかすり
別よ何ともいはつ母之
三 源の出家のうさへお
かしうんいそくめども
世間の思ひのまぎれうむ
家しまうげ後様あるべ
しと此わしくはうく。
それよりてもさへ
此身をくらよまする世ね歌
ときかうとく

きりふさうりてあつしくゝし給ひしかうり。
うり此身のありさ海ぬがりつくりうり。
ぐさしよこ南うりげをえしめて人はにこ
と嫁ろさるかくいたけるさ給ふりゝる
しくつるはすきせをおひそうべくれるど
のもくめ給ろう身あきこつうくもく
してつるにきうしるも。もれもさあし
あらしと此わ南うりるしき給こうられ
まはこの世にこゝろめてきこへのこうだ
まりね。ひさ給にそそうひにをもむさ
うんまさうり木あるましこ給いとうく
ゆさめんりこえのさらこゝろまじへひつくは
ねがうん名みも入りてくやと夜きき
をこのおひすらしるのあよまきれさせあ
へとあらで仏を念しまり給ひ本くのれ
とあつひ。肉をすてめなりりて例のこ海
うたうりめはあつくそ。いとくゝこ
え給。そしめしうこころの和にゆは。
さうしよるまごくもめみもそかをさぞ
まうれ。こうよかうのあふしとあつまし
されど。人は浪あくちきさ海よさそし。
今さうしよ我世のすむこよりうくそのしく。
こうつきこきまうひまそ。世中をする人
そむきよけつと。うのれとくしまうへ名給

ちしの如く表ハともまた
つましくしまらぬ
三 致仕大臣の念ゆのする
となるさぬんしうじ
めかうおおはうるべく
思ふ 汝の中をうひ
ふしぞかし

にほひ男と伝へし気
細 葵上を伝給ふ父母を
今はなく御ゆかりもうせ
給へくの数多き
よし也

覚しつゝむも哀に心ぐるしうよすがなき
るげきをさへおぼし給ふ。ちしの大臣
哀をもおりすぐし給はぬ御心にてかく
世にたぐひなく物し給ふ人のはかなく
紫上の事
うせ給ひぬることをくちおしく哀に
思して。いとしばしばとひきこえ給ふ。
孟 致仕の人葵上のこと
細 八月なれば也
昔大将の御母うせ給へりしも。
このごろのことぞかしと思し出るにい
ともの悲しく。その折かの御身をおし
花 葵の事を申也
みきこえ給ひし人の多くもうせ給ひに
けるよ。おくれ先だつ程なき世
なりけりやなど。しめやかなる夕暮になが

いにしへの　細 葵上を以
孟 致仕の方葵上乃
うせし今のやうに心は紫
の上は露とさそふと

露けさは　細 世の中のむなしき
事の理はしらずといへり
孟 源の心も今も生れぬ
無常は昔も今もかはらねど只秋が
かなしきと　細 無常
其いへのあはれをことにおもふと
ありさきをもつくみく詮

め給ふ。空のけしきもたゞならねば御子の
柏の弟
蔵人の少将してたてまつり給ふ。哀なる事
どもこまやかに聞こえ給ひて。はしに
致仕大臣
いにしへの秋さへ今の心ちしてぬれに
源の返し
し袖に露ぞおきそふ。御返し
のかうし出られてなまめかしくて
秋のこと思しうちさへあはれなる
ざをそひものへ給はぬまでに
なし
源
露けさはむかし今とも思ほえず
源の消しの心
孟 源の意を致仕の方
大かた秋のよこそつらけれ もの
きれころのまくすへばまちとりあへて

つらく言ふも見てくらり
孟源氏の御心の切なるまゝく
うつゝは一段と想ふさ魏との
まゝん事大ゆく秋の事し
ことしみこしあしてよくるとし
さもとくこ　細　輕賤く
宗紙そいは叢上叢書あり
う世給し時源氏の御為
かぎりあればこちもくて見え
衣液久ければ御ぞ袖を
ふらしみしいれかぎり
あれいしは御衣のさくいば
ま業上う世あふ所を
うもそえあつ人ゝれいふ
ぎこ面やうよそめ給

そぞふらくおられんおどろきと　孟白　細　靫負大臣の御方へかめ給ふ之
たえろうしけくりし。めしく。めのまり門なこさ
やかくのれうろさ海をすれば。めやもくさ　しくさ穂ふと思顔しくく之
孟る　ふしふびくのうさりおうしぬれりつくひ　靫仕の
のりこおりぬるうしく坊ひさくく給うらしく　靫負の趣をいふ之
ことの給しまうは今もとうしこ海やうり　曙　濃色のここ之
てこそまろわり。世中よさいそひありめ　細　紫上を知めくる之
でさ人も。めいあうえうさの世よそね
まれ。しさこまつけてもこころのうきりと
ごりて。人のあめうりしここ人もあり。いあ　業上ハ
さくらよいあつもし之　やあつさせぐもとろあうへふもうけされ　けいれされ之
まろうくまとく給こともあることへ
けしも。世は御めしれりめてあうりあ

うしもおりまうしき
おもえらん人の紫上を
かいしるかと二段よう
あり　思案　物和しる人
しむくすりんし人と来
はつふま何つましかゝら
もくし　二段く

まつけて、ふうくしくあつがさるまし
紫上なり　ひとのれこころうくぞへまうりし。うしもおゑ
まじき物和くその人さへそのしるは風の
あさ其のしるよつけつおすぞさとさね
はおしおしそ御のよもらくてまろけし
故桐壺と云ひ知りかへ　人のあひうすごうじくさ世るのしとしばしろ　あさ宮あ
女房く　おしくつくまつりあれさくひとぐくみで
しもあれる命うくめしうさし絵すけ
きつ。あまるなりこの世乃ぬの山ずさ
あぞしよ。あひしろもありろ。浅茅原乃
細　桐壺　中宮之　まさいのまゝもりも。おそれいかはせうそ
こしむぞつきをぬしくもさくまひ

かれこれ　細　孟秋乃
あはれそひのるうとゆう
孟秋は七月の比なり紫の云
をぬをまふは秋いられ果
る成るあるべし果して秋三
まふよくく根しそとろ
んことりそうのふと
ありあかれそらと八葉
上のゝ世出くうとはうる
るべし

のかりかし　晩　のかりかし
とい后の御位のかるべ
し秋ぬてぬとは別殺
世よおきさてうきを
哀とゆかしめ色とうや
細樓としのかりかし紫
ふとと紙禄つるやとへ人

て
かれこれ數添ひてとりしもやるせなく人の秋
よこゝろをとゞめぶりなん、いまはすんしりつ
ちかれぬるうとさきかりをも、物あはれに流る
かれたしつゝ人も垂らしく〜給ふはかなり
かしうらんさきのあやくさかのはたゞみのみえだ
りりてもおりしまれとうてこりのまれ
あやそくは笑しつゝとらのあと、後のこゝろ
ゐるを紬の以と猶あさくえうときやう給ひつそ
のかりかし〜くりねるぶしもえうろゝよ
かれおくさゝてぬつゐろぞぬ世てはあはしつ
こののそしりとたゝう打ゐがめて出かうくすゝもて

ゑみぞし給ふんよまら
秋をそぞよし垂て面白
きあく　細
あがしよ　我身のあはれく
しさまに秘めてとくら
さかく幻にとえてさる
孟源の心教あさうろくるよ
へうらぶて

人ぞてをえぐうり
孟紫敬ふといふんかくよ
とき源の人法を思惟持
く
えかくしくのあひをさら
あかるみうりのかれば
孟源の志部深く青乃

くうくよしもあかされども、まれらうこ
との限りは、かれぐ〜とさ〜く笑しうゝう
こしあかりうきまぶつらりつよ、女がたこしまゞそれ
つしゆきとて、仏の御前よ人よりけり〜びを
てるしてのどやうよそくるひ給ふ、ふ〜て
せとさとりうろとゝみしと笑しえへうと涙
ある別ぞいとくらあはしきわざなり
そら。今はそらすの家もくらく〜によまき
あまじく、後の世をとひさうちよかは
しらつとゝもとあすしされどひんさ
とをくかりゝみかるん、わがかさるうりを
あかれわがのこゝどもとらかくさくのあひ

思ひ出し侍しくも源の
ありく侍られぬとふ
哥
うゑやとのゝ　細世とのゝ
ふくるまをくるの
ミちひまふく　孟源の心
まゝとや世とのかなく
とはりみそてとし給よく
何桃ても　こゝのなへかり
いこしてきゝや　がか
世のつきらみましん

亜川ゐしくあうり久達ハゐ福の君ちまん
もりりちてつくしもくり給ほか源のかや
とのゝわが身をとこゝろづかひきこれ給
みあり出伯りとくくあてゝつりなら
三月日のゐす之発　南のゐれゐらく次の
ときまゐらせて
と覚のこゝろのうす中ゐあるみどくも出家
細咲ゐ之
しまさゐく世のつらゐしくひきくまみ